

令和 4 年 5 月 31 日現在

機関番号：12602

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12317

研究課題名（和文）Aldous Huxleyのフィクションおよび思索的随筆に見られる語り的手法

研究課題名（英文）Narrative Techniques in Aldous Huxley's Fiction and Speculative Essays

研究代表者

猪熊 恵子（Inokuma, Keiko）

東京医科歯科大学・教養部・准教授

研究者番号：00508369

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は当初、英国での現地調査等と並行してハクスリーのテキスト研究を進める方針であったが、コロナウイルス流行により海外での研究が不可能となったため、方針を転換し、ハクスリーの代表作『素晴らしい新世界』において問題化された「生命の誕生」というテーマを中心に据え、小説が「誕生」を描くことの意味と困難を再考した。

まずはジャンル論から考察をはじめ、「映画」「叙事詩」等との比較対照のなかで「小説」ジャンルのありようを捉え直した。これらの成果をもとにハクスリーの作品分析をおこない、彼の作品群が「個人」の境界線と、それを策定しようとする「小説」ジャンルそのものの限界をえぐるようなものであることに光を当てた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ハクスリーらの小説作品を他ジャンル/多ジャンルの作品群との比較対照のうちに捉え直すことを通じて、多くの批評家が当然のものとして内面化してきた価値観「小説とは何よりも「社会」のなかでの個人のありようを描写する書き物」である「そのものを問題化して分析した。結果として、「小説とは社会のなかでの個人のありようを描写するもの」という、一見して明白かつ簡便な定義は、実のところ「社会」「個人」の始まりや誕生という概念設定を曖昧にしたままの、きわめて不確かで危うい定義である点を、ハクスリー作品の分析を通じて明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The original plan of this project was to conduct research on Huxley's texts along with some field research in the United Kingdom. However, the coronavirus outbreak made it impossible to pursue the planned research. The renewed plan focused on the theme of "birth of life," which was problematized in Huxley's masterpiece *Brave New World*, and reconsidered the significance and difficulties of depicting "birth" in a novel. In the early stages of this research, I approached the theme from the genre theory, analyzing and discussing the genre of novel in comparison and contrast with other genres such as film, epic, and poetry. Based on the results, the research finally shed light on the fact that Huxley's works are not merely satiric essays, but that they explore the boundaries of the "individual" and the limits of the genre of "novel" itself.

研究分野：イギリス19世紀、20世紀小説研究

キーワード：語り 叙事詩 ジャンル 小説 生誕 誕生

1. 研究開始当初の背景

本研究は Aldous Huxley の著作再考を主たる課題とした。その課題を設定した背景には、1) ハクスリーの語り、単に時代を風刺するディストピア/ユートピア精神に則るものではなく、進化論/神秘主義的議論のなかで先鋭化された新たな人間存在の在りようを語り出すため、多様な手法を採用するものであること、2) ハクスリーが 2 つの対照的な概念を並列に対位させながら、そのあいだを絶え間なく往来して対象を語り出そうとしていること、の二点を明らかにしたいという考えがあった。

この展望に基づき、ハクスリーの小説作品(『すばらしい新世界』、『島』等)および思索的随筆(『知覚の扉』など)を広く取り上げ、フィクション/ノン・フィクションの垣根を越えて、ハクスリーという作家の「語りの視点」「語り手としての可能性」を包括的にとらえることを目指した。

具体的には、ハクスリー作品の読み込みと並行して、大学の長期休暇を利用してイギリスで現地調査をおこない、ハクスリー作品の草稿にあたり、執筆の舞台となった場所を訪れて調査をおこなう予定であった。しかしながら新型コロナウイルス感染症の流行により、この計画実行が困難となり、また世界的な感染症流行が長期化したため、研究期間を通じて一切の海外渡航が実現できなくなった。こうした状況を鑑み、研究方針を大きく転換し、ハクスリーの代表作『素晴らしい新世界』において問題化された「生命の誕生」というテーマを中心に据え、小説が「誕生」を描くことの意義/意味/困難を再考することとした。これが研究開始初年度の概況である。

2. 研究の目的

上述した研究計画の変更にともない、本課題は大きく分けて以下の三点を議論・分析し、なんらかの洞察を得ることを目的とした。第一に、小説というジャンルにおいて、誕生や生誕のテーマが正面から描き出されるとき、それが『すばらしい新世界』に見られるような、ある種の「規範性からの逸脱」や「非人間性」を伴うものであるのはなぜか、という問題を議論する。第二に、この議論に基づいて、小説というジャンルが射程にとらえうる/とらえられない「生誕」「誕生」「生命の始まり」とはどんなものか、について考える。第三に、既述した二つの問題意識を敷衍して、小説内に描出可能な/不可能な「誕生」「始まり」とは、小説そのものの「始まり」と、どのような関係性を取り結ぶのか、を明確にすることである。

3. 研究の方法

2で示した三つの課題を考察・分析するため、まずはハクスリーという作家や、小説というジャンルの枠組みをいったん広く開放し、さまざまな作家にあたりつつ、小説以外のジャンルにおける語り的问题や「生誕」「始まり」等の問題を考えていくこととした。これにより、逆説的にハクスリーの、または小説ジャンル全体の特異性に、裏側から光を当てることが可能になる、と考えたためである。

はじめに、まずは「映画」という媒体に着目し、ある映画作品が小説作品を下敷きとして作られる場合、語りの構築や「始まり方」「終わり方」等にどのような変化/特性が見られるのかという点について考察を行い、他大学の研究者らと連携して『イギリス文学と映画』という書籍を完成させた。これと並行して、「叙事詩」という、小説形態よりも長い歴史を持つジャンルに着目し、叙事詩ジャンルと小説ジャンルとの融合/葛藤を内包する 20 世紀スコットランド作家アラスター・グレイの『ラナーク』を取り上げ、そのなかに描き出される「始まり」と「終わり」を分析した論文を執筆した。

続いて、さらにスコープを広げ、長い歴史の変遷のなかで、小説内に描き出されてきた「誕生」の意義/意味を再考した。この点について、2020 年 10 月のディケンズ・フェロウシップのシンポジウムで他 3 名の研究者と共同発表を行い、18 世紀小説から 20 世紀小説に至る歴史の変遷を射程にとらえ、そのなかで小説がいかにして「誕生」を描いてきたか/またはその描出の難しさに直面して来たか、を論じた。また、合わせて 19 世紀作家ディケンズの小説における「誕生」描写の不思議にも焦点を当てた英語論文を執筆した。

これら三年間の実績に基づき、最終年度には、当初の目的であったハクスリーおよび小説ジャンル全体と「誕生」「生誕」というテーマとの特異な関係性について光を当てべく、『すばらしい新世界』を取り上げた論文を執筆した。

以上、本研究に関しては、研究計画当初に新型コロナウイルス感染症の流行により大幅な軌道修正を必要としたが、結果的にはこの変更により、大きく視野を開き、俯瞰的視野にたった研究成果を積み重ねながら、徐々に内側の小さなテーマへとフォーカスを絞っていくような研究方法を採用することが可能となり、掲げた研究テーマを幅広い観点から考察することができたと思う。

4. 研究成果

ここでは、5に後記する著作、出版物を軸としながら、4年間（当初計画3年＋コロナウィルス感染症流行による研究計画変更のため1年間延長）の研究期間を通じた成果を以下に述べる。

まず研究初年度にあった方針転換に伴い、研究のスコープを広く拡大し、小説というジャンルおよびハクスリーという作家を俯瞰的視野から分析することの準備とした。そのため、まずは2018年度終わりから2019年度初めにかけて、他大学の研究者たちと共同して『イギリス文学と映画』という書籍出版のプロジェクトに関わった。

この書籍に寄せた「古さ」と「新しさ」のせめぎ合い——チャールズ・ディケンズとデイヴィッド・リーンの『大いなる遺産』という論考では、「小説」というジャンルと「映画」ジャンルとの混淆について考察し、それぞれ媒体の語りのあり方やプレゼンテーションの特徴を比較検討しつつ、そうした語り／プレゼンテーションの形態が、小説執筆／映画製作当時の時代背景と、インタラクティブな関係を持っている点を論証した。

また、こうした書籍執筆の傍ら、Jeremy Tambling, *Charles Dickens, Nicholas Nickleby and the Dance of Death* という書籍の書評、Daragh Downes and Trish Ferguson eds. *Victorian Fiction beyond the Canon* という書籍の書評等も完成させた。特に後者の書評では、キャノン・フォーメーションのあり方という大きなテーマに対して小さなケーススタディを積み重ねる Downes と Ferguson の論の組み立てから、自分の研究方針に関するヒントを得た。

これらの研究計画と並行して、2019年初めから一年間をかけて、20世紀スコットランドの作家であるアラスター・グレイのポストモダン小説『ラナーク』を分析の対象とし、その小説内に遍在する「叙事詩」的要素について考察した論文（「アラスター・グレイ『ラナーク』（1981）——二〇世紀的叙事詩の形」）を執筆し、東京大学の高橋和久氏編『二〇世紀「英国」小説の展開』の一章として寄せた。本稿は、グレイの作品にみられる「スコットランド」というテーマや、「叙事詩」というジャンルが、作品全体の「始まり」や「終わり」、またはそれらの概念の小説内での提示のあり方とどのような関係性を切り結ぶかについて議論を試みたものである。本稿執筆により、小説というジャンルが本来的に抱え持つ「始まり」という概念との葛藤を明確化することができたと考える。また本研究計画全体に照らして考えれば、「スコットランド」「叙事詩」等について深く議論する論文を執筆することで、イングランドの小説家であるオルダス・ハクスリーに対して、外側から俯瞰的にみる視点を得ることができたと考える。

その後、2020年度には上記の論文および書籍執筆で得られた洞察をもとに、2020年10月に行われた日本ディケンズ・フェロウシップのシンポジウムに佐々木徹氏（京都大学）、板倉巖一郎氏（関西大学）、阿部公彦氏（東京大学）らと登壇した。ここでは、18世紀ローレンス・スターンから20世紀オルダス・ハクスリーに至るまでのイギリス文学史の流れを確認しつつ、主人公の「生誕」、人間の「誕生」について議論した。具体的には、小説作品が「生誕」・「誕生」のシーン正面から扱う場合、常にリアリズム小説の前提にゆがみが生じざるを得ないことを指摘し、小説ジャンルがその描写の射程におさめうる限界点について分析を試みた。この発表を通じて、「始まり」という概念は「終わり」という概念と比べて、その物質的実体性がきわめて不確かにならざるを得ないこと、なんらかの言語体系の確立を前提として成立するあらゆる文芸作品、なかでも作品としての「全体性」を志向せざるを得ないリアリズム小説においては、その「始まり」を突き詰めて考えていくと何らかの軋みが生じざるを得ないものであることを論証することができた。

こうして小説ジャンル全体が抱える認識論的限界について俯瞰的にアプローチする一方で、従来から行ってきた小さなアプローチ（個別の小説作品分析）も継続し、英国アバディーン大学名誉教授 Paul Schlicke 氏、名古屋大学松岡光治氏らのプロジェクトに参加し、Athena Press より、2020年12月に *Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays* を出版した。

ここまで上げたすべての研究成果に基づき、最終年度には、小説において「生命」を生み出すとはどんなことか、というテーマについて Aldous Huxley の『すばらしい新世界』を取り上げ、彼の作品内で描かれる人工的な生命の「製造」というテーマと、彼の語り口とがどのような関連にあるのかについて研究した。またこのテーマ的側面から考えてみれば、小説（または文芸）ジャンルが一般に「死」の場面を描くこととの高い親和性を示す一方で、「生誕」の場面を（なんらかのパロディ化の要素なしに）描くことが極端に少ないのはなぜかについても思索を進め、

「始まり」の概念の定義的曖昧さを議論の対象とし、その曖昧で不安定な境界設定と、小説ジャンルそのものの境界のあいまいさの関連について論じた。最終的には、ハクスリーの「小説家」としての評価の低さや、彼の作品の「小説性」への疑義そのものが、批評家が当然のものとして内面化している価値観——小説とは何よりも「社会のなかでの個人のありようを描写する書き物」である——の反映であることを提示した。あわせて、「小説とは社会のなかでの個人のありようを描写するもの」という一見して明白かつ簡便な定義は、実のところ「社会」「個人」という枠組みを哲学的に追求し始めるや、きわめてあいまいで規定困難な概念となりうることを示し、その省察をもってハクスリー作品を改めて振り返ることの意義に光を当てた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Keiko Inokuma	4. 巻 60
2. 論文標題 Review: Daragh Downes and Trish Ferguson eds. Victorian Fiction beyond the Canon	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 111, 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Keiko Inokuma	4. 巻 42
2. 論文標題 Review: Jeremy Tambling, Charles Dickens, Nicholas Nickleby and the Dance of Death	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 The Dickens Fellowship The Japan Branch Bulletin	6. 最初と最後の頁 30, 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 猪熊恵子	4. 巻 52
2. 論文標題 「小説ジャンルの境界線 『すばらしい新世界』を読む Blurring Contours of a Novel Reading Brave New World」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京医科歯科大学教養部研究紀要	6. 最初と最後の頁 39, 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11480/kyoyobukiyo.2022.52_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 猪熊恵子
2. 発表標題 「『僕は生まれる』という不思議と普遍性」
3. 学会等名 ディケンズ・フェロウシップ日本支部 令和2年度「ディケンズ没後150年記念大会」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Mitsuharu Matsuoka, Keiko Inokuma	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Athena Press	5. 総ページ数 366
3. 書名 Dickens and the Anatomy of Evil: Sesquicentennial Essays	

1. 著者名 松本朗、岩田美喜、木下誠、秦邦生	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 408
3. 書名 イギリス文学と映画	

1. 著者名 高橋和久、丹治愛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 松柏社	5. 総ページ数 460
3. 書名 二〇世紀「英国」小説の展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------